

平成29年度 第3回協議会（議事記録）

評議員：石原典子（民生・児童委員）、後藤洋平（飛騨古川青年会議所理事長）、洞宏樹（卒業生の保護者）、稲葉佳代（主婦）

地域代表：布俣正也（岐阜県議会議員）、都竹淳也（飛騨市長）、清水貢（飛騨市教育長代理）、向川原眞郷（古川中学校長）、三橋浩之（国府中学校長）、田中晶洋（ブライトスタッフ（株））、渡邊正憲（（株）飛騨ダイカスト代表取締役）、岡山正喜（アルプス薬品工業（株）取締役総務部長）、松場慎吾（合同会社 hidaiiyo 共同オーナー）、関口祐太（キャリア教育コーディネーター）、川上佳洋（「夢のたまご塾」飛騨アカデミー実行委員長）、仲島豊（吉城高校育友会長）

岐阜県教育委員会：堀貴雄（教育総務課）

職員：鈴木健（校長）、細江雅紀（教頭）、秋月正幸（事務長）、下嶋和長（生徒指導主事、記録）小原誠（教務主任）、藤守学（進路指導主事）

1. 報告（15:10～）学校長より

資料1は今年度の取組についての報告である。

資料2は前回いただいた意見に対する、学校としての取組み及び改善策である。すぐに対応できるもの、検討したいというものを記した。例えば、「アルバイト」など働いたことを単位にできないかということについては、資料4にあるようにデュアルシステムという制度がある。本校は単位制を取り入れ、いろいろなメニューを用意できるので、選択肢の一つである。資料3は吉城高校の方向性を簡単にまとめたものである。まずは30人学級の実現と岐阜県版SSH（スーパーサイエンスハイスクール）に取り組みたい。単位制については色々な科目を設定できるため、一人ひとりに合わせた教育が可能となる。平成31年度からの実施予定である。資料5は「特別非常勤講師制度」についての紹介である。教員免許を持っていなくても優れた技能や知識を持っている方に授業をしていただくことも可能である。

2. 意見交換（15:20～16:20）

意見1

4月の会議では、生徒の主体的な活動があってもいいのではないかと、プレゼンの仕方ももっと魅力的な方法があるのではないかと等という意見を出した。しかし今日の発表を見て、生徒はこんなにも素晴らしい力があるのだと感心した。

意見2

自分が生徒だった時と比べて、今の生徒には自主性を感じた。卒業生として今後の活動が楽しみである。今後、高校生にも街づくりにも参加してもらいたい。青年会議所としても、高校生が参加できる企画を考えたい。

意見3

今年は一段と成長した姿が見られた。自主的に活動している姿を見て、「甲斐性がある」と感じた。地域の住人として協力できることがあれば協力したいと感じた。

意見4

生徒が企画して、問題を提示してそれを解決していくというプロジェクトを見て感心した。しかし、もっと全校の生徒に広まって、自ら参加する生徒が多くなるとさらによい企画になるのではないか。そうすれば、もっと深く地域とつながると思う。

意見5

自分が高校生の頃は主体的に動くということがなかった。今日の発表を見て吉城高校生が地域に自ら出て行って、主体的に活動している姿を知って大変感心した。「吉城高校はこんな活動をしている」という情報発信をしてほしい。飛騨市に限らず高山市にも広がっていくと飛騨地区全体に吉城高校の良さが伝わっていくだろう。

意見6

企業では問題解決能力は特に大切である。YCKの活動はまさにその力を育てている。この活動を続けることで将来的に素晴らしい人材が育つと期待する。素晴らしい活動なので、ぜひ中学生や保護者に積極的に宣伝して欲しい。

意見7

素晴らしい発表だった。今後は地域が吉城高校のために何かしてやりたいと思えるようになると良い。どんどん外に出て地域で活躍している人とつながる活動をして欲しい。参加した生徒はYCKを通して成功体験をしたと思う。成功体験のある生徒とない生徒の差は大きい。今後は吉城高校全体として底上げを期待したい。YCKが生徒の心に火をつける活動であり、発見を与える場になると良い。

意見8

中学生の参加も検討したが今回は参加できなかった。今日の発表を見て、中学生にも見せたいという思いが強くなった。

子どもたちの姿には目を見張るものを感じた。中学でも総合的な学習の時間がある。その中で課題解決型の授業が求められるが、結局は与えられたものをどうこなすかという教師主導の授業になる。今日の発表は大変参考になった。

4月の英語観光案内ボランティアには高校生と中学生と一緒に活動できると良い。

意見9

高校生が地域に入り自発的に活動している姿に感銘を受けた。最初は英語観光案内ボランティアから始まったと認識しているが、市長がパネリストとしてステージに上がって話をする活動にまで発展していることに驚いた。生徒が自分の可能性を広げつつあると感じた。発表の中に考察の部分がもっとあると良かった。吉城高校の全生徒が参加して、どの生徒もYCKを語れると素晴らしいと思う。

これから大学入試が大きく変わる中で、ボランティア活動と大学入試をどう結びつけるのか。その点でYCKはどのような位置づけになっているのか。また、SSH（スーパーサイエンスハイスクール）とYCKの発表はどのような形になるのか？

校長

YCK は主に授業の外で行っている。今後はカリキュラムの中でも活動の時間を確保したいと考えている。総合的な学習の時間を工夫して時間を確保したい。YCK の活動を通して語れる財産を個々の生徒が作っていき、大学入試改革で重要視される面接・小論文等に役立てることができる。

理数科はSSH がメインとなり、普通科はYCK がメインとなるであろう。

教頭

大学入試の面接では、他の高校とは違った活動（YCK）を語ることができ、強みとなるはずだ。それが、自分の進路実現につながる。推薦入試等への「攻め」の対策がとれる。進路実現への先駆的な対応をしたい。

校長

新しい大学入試制度では、国公立大学も3割はAO入試や推薦入試で入学生をとるようになるので、勉強だけやっていたら良いというわけではなくなる。

意見10

育友会として、吉城高校の様々な行事を見させてもらっている。柏葉祭では生徒が一致団結してステージを作り上げる姿から自主性が感じられた。YCK の報告は初めて見たが、生徒が主体的にやっていると感じた。しかし、地域と関わって活動しているにも関わらず、まだまだ地域の方には知られていない。もっと地域に積極的に発信しても良いのではないか。また、参加する生徒だけでなく、全員が何かYCKに進んで携わる体制ができるとさらに良くなるのではないか。

意見11

近くでリーダーの成長を見させてもらえた。課題はまだまだある。情報発信は大切な部分であるが不十分であったり、YCK 自体の認知度が地域の中で低かったりと課題は山積している。地域の課題解決だけでなく、自分たちの目の前にある問題を解決していくことも、良い学びにつながる。

意見12

学校の外へ出た学びにはインターンシップ、外部活力導入支援などがある。しかし、YCK はさらに別の良さがある。学校の外へ出て課題を発見し、解決していくことだ。もちろん地域の方々に支援をいただいているが、この一連の活動を企業、行政の力を借りて体験できることは素晴らしいことである。

願わくは、この素晴らしい活動のステージを古川に限らず、飛騨地域全域に広げていくべきである。いろんな可能性が出てくるはずである。

学校長

ご意見を踏まえて、ノウハウを作りながら、高山地域へも地域を広げていきたい。また、飛騨神岡高校とのコラボレーションも考えたい。

来年度は古川祭の20日を学校休業日とした。古川祭に関わる生徒を募るつもりで

ある。

3. 飛騨市長より提言

YCK は今一番求められている教育プロジェクトではないか。自分で考え、自分で解決していく力が求められている。しかし、どこで学べるのかと考えると意外と少ない。この力は人生を拓いていくための力だと考えると、学校教育で補っていく部分ではないか。

YCK の評価に関しては、実は評価する人はいないと考える。先生方自身もこのような体験がない。従って、自分たちの経験を通して、良かったこと、うまくいかなかったことを踏まえて自分たちで自己評価をさせることが大切であろう。

実は飛騨市の行政自体も巨大な YCK プロジェクトと言える。問題は山積みでそれをいかに解決するか方法を考え、予算を立てて問題を解決しようとしている。

YCK の活動を通して自分たちの町の問題を知ってもらうことがゆくゆくは自分の町へ将来戻ってくるきっかけにもなる。

吉城高校の活動は飛騨地域の中では突出していると自負している。

YCK の生徒達だけでなく先生達自身が地域に飛び出すことも大切だと感じる。

5. 布俣県議より

かつて、吉城高校はなくなるのではないかと心配にした。しかし、ここ1・2年は地域の方がなんとかしたいと考えるようになって YCK に関わられるようになった。それが大きく変わってきたことである。YCK は何のために行うのか、それは地域を愛して、地元へ貢献する、そしてそれを地域にアピールすることである。その連携ができつつある。このプロジェクトは地域との関わりが密接でなければ成功するはずがない。

今後は、このプロジェクトが一部の生徒だけの活動ではなく、吉城高校では当たり前ですと全生徒が自信をもって言える活動に位置付けていただきたい。ぜひ来年度はそうなるような取り組みをしていただきたい。

中学校、高校の見えない壁は取り払って、オープンに連携して欲しい。

今後の課題も見えてきた素晴らしい報告会であった。

6. 教育総務課

県19校をG1、G2に分類しH31～H40の間に3クラス以下になるのではないかとという問題に対し協議会を立ち上げた。

今日の発表会で、生徒の顔が良い、生徒が大事にされているということを感じた。何かにチャレンジし、うまくいってもいなくてもきちんと評価され、認められているという印象を受けた。

キャリア教育とは答えは一つではない。キャリア教育は10年ほど前から言われるようになったが、過去には子どもたちの身近にあった本物がなくなりつつある。その中で、本物を植え付けることがキャリア教育だと考える。学校の力で、子どもたちにとって良い教育環境を作りたい。

7. 閉会

次回は第1回協議会を5月中旬に行いたい。H30の吉城高校の取組の提案が主となるが、YCK活動に関する生徒からの反省や提言も報告したい。